

あらためて考える生活の価値

なぜ都心？

35の理由

1990年代半ば、バブル崩壊後に始まった都心回帰は、今も続く。

今、都心に住みたいと願う人は、景気や地価の変動以上に動機となるもの
——都心の家や、都心での生活に大きな価値を見いだしているに違いない。

東京の街の何が人を呼びよせるのか。

都心居住を追ってきた本誌が、あらためてその価値を検証、整理する。

構成・文／今井早智、リサーチ／田中ミサ(9P、14P～15P)

コンパクトシティ

職、住、遊に、教育、医療……。
すべてが徒歩圏内のコンパクトシティという
アイデアを、都心居住は実現する。

1 空間と機能の高度利用

東京のこの10年を振り返るとき、六本木ヒルズを語ることに異論はないだろう。「ヒルズ族」なる言葉も生まれて話題を呼んだ。しかし、当初から主役は別にいたのだ。職場に近く、レストランや美術館が隣にあり、緑豊かな庭園でくつろぐ。そんな日常を謳歌する六本木ヒルズの住人たちだ。彼らによって、戦後の占領軍の繁華街にルーツをもつこの街は大きく変わった。今、六本木の真ん中でペーパークーを押し出す親たちの姿は珍しいものではない。

これだけ大規模な再開発が地域に根付いたのは、ひとえに暮らしゃすささだろう。森ビル・営業本部の山本将克氏が話す。「働く、食べる、遊ぶ、学ぶ、あらゆることが徒歩圏内で実現します。居住者の方々は、レジデンス棟というより六本木ヒルズという街全体を住まいとしてのお気持ちでしょう。我々は、『街』に住むというライフスタイルと、それによって得られる豊かな時間とのご提供に努めました」

オンとオフとの境界が曖昧になりつつある現代で、その両者を自在に行き来できる、これこそが都心居住のメリットだ。同社では当初、入居者の多くに外国企業の駐在員を予想していた。しかし、その快適さにいち早く気づいて評価したのは日本のビジネスパーソンたちで、実際は半々だったという。六本木ヒルズはまた、建物を集約・超高層化することで足下の空地を多くとり、緑やオープンスペースを充実させている。自然と触れ合い、人々が出会う場を大切にするためだ。土地に限りがある都心では有効な手法といえる。空間の高度利用と、機能の集積。こうした合理的な街づくりは、「コンパクトシティ」として近年注目されている。都心に住むとは、街を利用し、街を楽しむことにほかならない。

イラスト／奥原しんこ

